二十四の瞳

――― 映画文学人生論

原作：壺井栄 (1952) 「ニュー・エイジ」
監督：木下恵介 (1954)　　脚色：木下恵介
出演：大石先生　高峰秀子　　撮影：楠田浩之
岡田磯吉　田村高廣　　音楽：木下忠司
香川マスノ　月丘夢路
川本松江　井川邦子

烏（カラス）なぜ啼くの　烏は山に
可愛い七つの　子があるからよ

木下恵介監督の映画『二十四の瞳』は中学生のときに観て、感動した。この年になればもう感動しないだろうと思いながら、ＤＶＤを借りて、もう一度観ると、やはり涙が出た。

読者や観客の感動という情緒的要素を評価基準にすると、文学よりも映画のほうが、感動を与えやすい。その点では映画は有利な芸術のジャンルではないかと思うことがある。では、『二十四の瞳』のような映画がすぐれた芸術なのだろうか。

しかし、私という個人の情緒的要素が文学や映画のや芸術の評価基準になるとは思えない。

そういえば、『二十四の瞳』は原作を読んでもいない。おそまきながら、今頃になって、原作を読んだ。ストーリーは大筋ではかわらないが、映画と若干違うところもある、

昭和三年、瀬戸内海の島の分教場に赴任してきた女教師と十二人の小学一年生との心の交流――戦争をはさんで、昭和二十一年、ふたたび分教場の教壇に立った女教師を招待し、生き残った六人が幼い小学生だった昔をしのんで合唱する。

烏（カラス）　なぜ啼（な）くの
烏は山に
可愛い七つの
子があるからよ

二十四の瞳 ――― 映画文学人生論

その合唱で感動がもりあがり、童心にかえった観客はカタルシス（日常生活の中で抑圧されていた感情が解放され、快感がもたらされること）を得ることができる。ところが、この場面は原作ではマスノによる「荒城の月」の独唱だ。

はるこうろうのはなのえん
めぐるさかずきかげさして

童謡「七つの子」を少学一年生のとき、みんなで合唱する場面は原作にはない。マスノがまっさきにうたいだして合唱したのは、

山のカラスがもってきた
赤い小さな　じょうぶくろ
あけてみたらば　月の夜に
山がやけそろ　こわくそろ

という「山のカラス」という私の知らない童謡。

映画が観客の共感を呼び、感動を呼びおこすことに成功したのは、やはり、「七つの子」をみんなに合唱させたことだと思う。そのメロディに戦争はもうこりごりだという庶民感情にうったえるものがふくまれている。『二十四の瞳』の由来は作者の両親に育てられた十二人の子供だという。

寒鴉山には可愛い七つの子